

ザ・バス・ホール

帰國者の裁判を考える会

東京都港区新橋2-3-8
営業部
東京2-3-8
8-16
新橋石田ビル4階 教授連絡センター 気付
「帰國者の裁判を考える会」 定価200円(送料70円)年12回分
3000円

弔辭

庄司宏先生の逝去を悼む

悲しい知らせを新聞記事で受けました。

昨年に喜寿を迎えた時はあんなに若々しかったのに。

今年二月に苦しく咳込んでおられたので非常に心配したのですが、回復されたようで安心していました。

今年四月が最後の面会になってしまいました。

先生が入院されていたのに見舞いに伺えない、こんなに悔しいことはありません。監獄の壁を恨み叩きました。

話足りませんでした。それよりも何よりも、私たちは先生に安心していただけるような闇いを示してこれませんでした。

ロシア十月革命の発展を確信され、ロシア語と英語を修め、世界革命の勝利とその日のために外務省で闇いを準備されていたのに、戦後世代の私たちは、先生方の闇いを正しく継承することができませんでした。

リッダ闘争の時は、危険を省みずにイスラエルまで岡本同志の弁護に乗り込んでいただき、わが同志たちの度々の逮捕時には積極的に弁護を引き受けていただき、今、私の弁護も引き受けていただいている。先生の恩に報えないまま、先生に先立たれ、悔いだけが残ります。

先生の身を真紅の旗で包み、インターナショナルと同志は艶れぬの歌をもって送ります。

ロシア十月革命によって開かれた社会主義革命は、その後の官僚主義と現代修正主義の為に第一幕が降りました。

先生！ 世界の人民は必ず第二幕を上げます。私たちはそうなるように全力を投入します。日本革命と世界革命のその勝利の日まで、私たちの闇いを見守って下さい。

先生、安らかに眠ってはいけません。

1991年10月6日

丸岡 修

一九九〇・五・一五

更新手続に伴う意見陳述（上）

日本革命家

丸岡 修

目次

はじめに

第一章 戦後世界の再編と人民革命の時代

- (一) 現代的位置
- (二) いわゆる「ソ連・東欧問題」について
 - ① 社会主義が果たしてきた役割／② ソ連新社会主義の破綻の根柢
 - ③ 新思考の積極的側面と否定的側面／④ 東欧「改革」の積極的側面と否定的側面／⑤ 展望
- (三) 国際帝国主義の動向
- (四) 日本の動向
 - ① 帝国主義の延命／② 矛盾の激化
- (五) 真の人民権力の樹立へ

さいごに

はじめに

著者陳述にあたって、まず第一に八八年一〇月「眞面目陳述（裁判所の言つところの罪状認否）」で表明したことまとめておきます。

冒頭で主張したこととは以下です。「一、私はに対する検察庁の公訴資格と裁判所の審理資格を問う」の項で、裁判所、検察庁は独占資本と自民党の支配の道具となり下がつており、私を裁ぐことはできない」と、司法当局の反動性の論証、我々の闘

第二章 日本の司法の反人民的性格と私のこの裁判に対する態度表明

- (一) 國家独占資本主義の人権支配の遺算としての司法
- (二) この間の反動判決について
- (三) 刑事第一〇部による処遇について
- (四) 東拘での処遇について

さいごに

いは正義の闘いであり刑事事件として裁かれるものではない」と、私の憲法は合法的な権利であり不當理由に対する訴訟の行使を「裁判」問題としない」と、検察の不当な「兵の起訴事項の認否そのものを拒否する」と、そして「革命無罪であり、無条件に即時に釈放せよ」と要求しました。「一、「私が革命家になった動機」の項目で、「私の革命家としての正当性を主張しました。」「二、「日本赤軍の闘争はテロリズムとは無縁である」との項目で、「日本赤軍の過去の武装闘争の意義と正義性を明らかにしました。さらに「テロリストの頭目はアメリカ帝国主義であり、その番頭が日本反動政府である」とを「証明」し、「日本赤軍の武装闘争の位置を述べてテロリズムとは全く無縁である」と明瞭化しました。そして公安警察にナツチアゲられた「ソウルオリンピック妨害」説や「臺灣闘争」説などを明確に否定しました。「四」現代世界の「日本赤軍の目的」の項目では、「現状は資本主義から共産主義への過渡期であることを示し、アメリカ帝国主義と日本帝国主義のバブル経済の実情を示し、日本の軍事の危険性を指摘しました。そして日本赤軍の目標を明瞭化しました。」「五」次に「青島陳述その2」で、「公安警察の数々のデマと誹謗の実態を暴露しました。

第一回、本日述べる点について、一つは、「冒頭の内外情勢の変化について」です。裁判官も検察官の記者に述べてもよく何の意義をあつませんが、捜査警察禁止という不当な処分を私に与えており発言を封じられているので、「この機会に述べるものですが。

その二つは、「日本の裁判所の反人民的性質と、私のこの裁判に対する態度表明です。冒頭では、「請負検査」そのものを否定すると言いましたが、日本の裁判所は「駆逐權ある」と言いかながら実際には「駆逐は法律」とする仕方なので、「認否」についてははつきりせましまう。

第一章 戦後世界体制の再編と 人民革命の時代

(一) 現代の位置づけ

ゴルバチョフ書記長のペレストロイカ路線を背景として、八九年六月のボーランドの選挙からベルリンの壁崩壊、チャウシェスク政権の一月の崩壊までわずか半年間で、東ヨーロッパ社会主義諸国旧体制が崩壊し、「ソ連型社会主義」を軸とする

したフルシャワ条約機構の陣営そのものが崩れました。「全人類的価値優先」のソ連の「新思考」外交によって、ソ・米の緊張緩和が進行していた状況とは裏腹で、戦後四十五年間アメ帝の反共包囲戦略によって創り出された冷戦構造は、根本的な転換の時代を迎えた。戦後世界体制の再編期に入ったと言えます。

東欧の「民主化」を指して、フランス、海部代表されるように帝国主義者やブルジョアマスコミは、「社会主義・共産主義の終焉、資本主義の勝利」と歓喜の声をあげています。一方、日本共産党や新左翼の多くは、「ソ連型社会主義の破綻であり、社会主義の破綻はない、むしろ正しい方向に進んでいる」、「スターリニスト官僚主義の破綻、歴史の必然」であるとしています。進歩的知識人たちは、「社会主義の破綻がどうかではなく、資本主義圏・社会主義圏の違いではなく、民主と人権を求める人々の勝利である」としています。市民勢力はもちろら、「社会民主主義の勝利、共産主義の誤りの証明」としています。不忠派などは、「左から右まで各派が共通して自らの立場から分析して述べており、主觀を含めて「好みいが況」としています。いずれの理解が正しいのかは、それで歴史が証明するでしょう。

眞の共産主義者は現在の局面を主觀的勝利を排して、客觀的に把握する必要があります。事実は筆者と認識したうえで、社会の發展走向に合致しているかいないのか、合致していないければ理論・論理があるのが、表面に誤りがあるのが眞實的で証しなければなりません。スターリン主義あれ、ソ連型あれ、七〇年代以降、帝国主義諸國と比較大抵は、社会主義諸國が経済的困難に陥っているのは事実です。そして、東ドイツ・ハンガリーの選舉にみられるように、旧政権に対する支持はあるが、改革の先頭に立った「社会主義の再生」を目指した人々への支持も低く、市民勢力を超越して資本主義化を前面に出した保守派がペゲモニー（主導権）を握ったのも事実です。旧政権下ではブルジョアジーに対する制限（当然にして）も人民の民主主義的権利が制限されていたのも事実です。これらの現象からみれば、「社会主義の優位性」が疑われてもやむをえないでしょう。だが、これらの現象の根柢をつきめれば、本来の社会主義のあるべき姿とかけ離れていたことの事実であることがわかります。ブルジョア知識人やマスコミは当然のこととしてそのことについては全く触れていません。もっとも、彼らに本来の社会主義の理念など理解できはしないので、「社会主義の終焉」に見えるのでしょう。

現在のソ連・東欧の局面は、人類史の発展の一踏みといえます。資本主義が好名屈折しながら発展してきたように、資本主義の發展形態としての社会主義。当然のこととして経済屈折しながら発展します。一七八九年のフランス大革命にしても、その定着まで王室・共和制・王制復古を繰り返し、百年の歳月を費しました。発達

した資本主義國がまだ社会主義革命が起つてない以上、遅れた資本主義國から出発した社会主義國の経済建設の困難は当初から予想されたことです。そもそもロシア十月革命の際にレーニンが指摘していたことです。帝国主義者たちが今、有頂天になつてゐるのはそれがあたかも、ひそかに炎が最後を勢いよく燃え上がるようなものです。

現代世界は、八八年の冒頭で述べたように、一九一七年のロシア十月革命の勝利以後は資本主義から社会主義への過渡期に入り、資本主義と社会主義の闘争の時代です。眞の民主主義、社会主義を求める闘争、民族の解放を求める闘争、社会主義の建設の闘争が帝国主義と勝利していく人類の歴史的大転換期です。転換期においては、社会主義と資本主義の闘争の形態は單に帝國主義と社会主義の対立から、社会主義的要素と資本主義的要素の矛盾として地球上のある場所、状況に現れています。革命と反革命、解放と侵略、進歩と後退が繰り返されます。矛盾に現れる方は、帝国主義國と社会主義國、帝國主義と第二世界、帝國主義國人民と独立資本、帝國主義國間の四つに代表されます。更に、資本主義と社会主義の闘争の時代である以上、資本主義の物質的、精神的反映は社会主義國內部、社会主義國諸國間、第二世界、帝國主義國内進歩勢力にも、官僚主義、大国民主義、修正主義、民族利益主義、改良主義、社会排外主義、セクト主義など様々な誤りを生み出し、「これらの誤りは人民の發展を抑止し、人民同士の結合を妨害する要因になつてきました。しかし眞の共産主義者がこれらの誤りを正し、矛盾を止揚していくなら、世界的に資本主義に勝利していく時代を切り拓いていくでしょう。なぜなら資本主義が抱えていた矛盾が止揚されていなければ、帝國主義とソ連・東欧の不満が緩和しても、本質的な矛盾の構造は何も変化していないからです。むしろ複雑化して誰にも予想しない方向に進んでいます。

(1-1) いわゆる「ソ連について

① 社会主義が果たしてきた使命

十月革命の勝利は社会主義革命を人類史上初めて現実のものにして、直後の帝國主義列強の革命、侵略を撃退し、ツァーの残党反革命分子たちとの戦いに勝利し、ソビエト連邦は資本主義の未発達農業國から一挙に進んだ資本主義のアメリカ帝国主義に匹敵するまでに生産力を高め、世界が一五年恐慌と二〇年代の大不況に呻吟しているときに完全雇用、八時間労働制、義務教育、無料医療などを実現しました。全世界で最初に婦人参政権、男女平等の普通選舉制度を導入したのもソ連

でした。無条件の民族自決権を承認し、フィンランド、ポーランド、バルト三国には独立を認め、帝政ロシアが奪った土地をアラガニスタン、イランに返還したのもレーニンのボルシェヴィキの人民ソビエト政府でした。後に資本主義國が取り入れざるをえなくなった社会福利制度などは、ソ連のモデルをみた労働者の運動によつていました。この資本主義國の社会主義的要素の導入は何よりも地球上に初めて登場した労働者の國家の存在によってでした。五十年代におけるソ連の国民所得の年間成長は一〇%前後を誇り、現在は世界の面積の1/4、人口の1/3、工業生産の四〇%を社会主義國が占めており、ソ連の工業生産は一七年には世界の三割を占めていたにすぎないのが、約一〇%にまで成長しています。第二次世界大戦ではソ連は千七百万人の人民をナチスに殺害され、モスクワ近郊まで西部を占領され破壊されながらもソ連の人民は生産力を高め、ナチスを撃滅し中ヨーロッパまでをソ連赤軍が解放した功績は歴史に残るものであります。スターリンの内外政策における数々の誤りを差し引いても、最初の社会主義國ソ連の果たした役割は非常に大きなものがあります。

戦後の国際生産主義において大国主義の傾向を持つつも、第二世界の民族解放闘争の發展にソ連は大きく寄与してきました。アメリカ帝國主義を頭目とする世界帝国主義が反ソ包围網を形成していた所以です。ソ連の第二世界に対する援助は「弱權を求めていたから」と多くの左翼の皆さんによく言いますが（実際、私自身もいわゆる「反ソ帝」派だったので、ソ連を「弱權主義」とみていましたが、バレスナ革命の現場に入つてこの認識が誤りであることに初めて気がつきました。ソ連はバレスナ革命の後方としての位置にありました）、アジア、アフリカ、ラテンアメリカでの民族解放、社会主義建設において、ソ連を中心とした社会主義國が反帝主義として果たした役割を、事実として評価する必要があります。

② ソ連の社会主義の破綻の根拠

第一に無期革命の停止があります。三六年ソ連は「社会主義制度の完全な勝利」を宣言し、三九年の第一回党大会では、「無階級社会主義社会の建設の完」と及び社会主義から共産主義への漸次的移行の時期にあると規定しました。五九年の第一回臨時党大会では「社会主義が完全かつ最終的に勝利し……ソ連社会は共産主義の全面的建設期に入つたと規定し、七〇年までに工業生産の絶対量でも人口一人当たりの生産高でもアメリカを追い超すとの目標をかけました。六一年には八年までに共産主義の物質的、技術的基礎がつくられ、共産主義社会が基本的に建設されるだとの見通しを示しました。「これらの評価分いかに主觀的で、アダマチズムで、ユートピア主義で、過大評価であったかは、ゴルバチヨフの度々の指摘にあるところです。生産手段の社会的所有化に対する形式としての評価、重

工業を基本とした生産力の発展による評価、計画経済の戦時統制運用などによつて、「社会主義革命の完全勝利」とはできません。レーニンは革命後の二〇年に「われわれは今日、社会主義的手段を導入することはできない。願わくはわれわれの子どもたちの時代、いな、孫たちの時代に」の國、その確立されることを」と述べています。社会主義革命の表現をレーニンたちはかなり長期に見ていたのは、一つは資本主義先進国における革命との結合によって連れられた農業人口の革命が発展するとしていたこと、二つに必要な応じて分配できる高い生産力を保障する物質的土台の形成が必要としていたこと、三つに人々の思想意識が自らの意志と共感によって單一の階級意識（労働者階級）へと志向されねばならないとしていたことによつていたと思ひます。ソビエト社会主義革命が世界同時革命かという問題になりますが、各国の革命の成熟度、条件、状況は異なつており、権力奪取は一国的であり、世界革命の条件が成熟するのを待つではなく、困難な条件であつても社会主義革命を帝國主義から防衛しながら推進する必要があります。一国革命であれ、重要なことは世界革命の一環として革命を継続し、いかに確実に勝利させらるかです。そのためには、社会主義の物質的土台（経済的土台）の確立と革民の労働者階級化が必要です。もちろん労働者階級といつても、旧カンボジアのボルボト派が誤解を犯した強制的、兵兵的、「原始共産主義」的なものではなく、能力に応じて働き労働に応じて分配される（さらにには必要に応じて分配される）条件において、知識労働と肉体労働の差異の解消、都市と農村の差異の解消、生産手段の全人民的所有の下に労働力の商品化を廃し、労働者が生産の主として在り、全社會構成が自らを革新して労働者階級を支持し、それと統一されるという意味においての労働者階級化です。インテリの役割を認め、農民を含めた労働者階級化す。この経済的、社会的土台の形成は思想文化革命、科学技術革命としてなされなければなりません。

ゴルバチョフは八九年一月の論文「社会主義の理念と革命的ペレストロイカ」の中で科学技術革命と文化革命について述べていますが、科学技術革命を近代的工業の確立、人間の利益や要素に適合した経済発展や近代的生産力の発展の問題とならえ、文化革命を生産の組織化と社会化、人民生活条件の改革としてとらえています。それだけでは不十分です。欠けているのは、一貫して毛沢東主席が提起してきたところの「社会主義革命の全面的闘争に一面化」、急激に行なおうとして、運動的に極端化してしまったことであり、中国のプロレタリア文化大革命で提起されたことである思想革命の問題です。中国の文化大革命を全面的に評価する」とはできませんが、既存革命―思想文化革命としての意義は認められます。この革命の失敗はそれをデルジョア思想との全面的闘争に一面化して、運動的に極端化してしまったことによる原因がありました。逆にソ連革命は貫徹して生産力の問題に一面化してしまいました。

人間の思想の変革を軽視してきました。ソ連型社会主義では、民の思想意識の変革による人民の積極的参加を抑制するのではなく、フルシチコフ以降の改革は「真し」て物質的利害関心への依拠とスターリン以降の官僚主義的行政的指令によるものになつてきました。

手次第は人間の役割を強調しています。生産は人間の労働、労働対象、労働手段の三つの要素で構成されます。が、決定的な要素は人間の労働であり、人間の目的意識が生産能力を大きく規定します。人が自らの労働に意義を負うければ、意欲を持つことはできません。社会主義の低い段階においては、「革命によって生み出された熱狂の助けを借りて、個人の利益、個人の物質的関心によって、経済計算制によって」の原則から、「自由な個人」と集団性とが有機的に結合したものへと發展せなければなりません。あらゆる形態の採取と抑圧からの解放が真的の自由であり、人による人の採取と抑圧の「自由」を含むブルジョアの自由意識（生産手段の私的所有から生じる）、わがままなアーティスト的自由意識を止揚したプロレタリア的自由意識が形成されなければ、「一人が万人の為に、万人は一人の為に」の共産主義的集団性は実現されません。個人の物質的関心と社会主義的集団性が一つのものにならなければ、資本主義的「自由」と何ら変わらないものとなります。個人の物質的関心の中味が、個人の意識において変革されなければなりません。個人の利益説明による労働意欲ではなく、「自由な個人」と結びついた万人の利益によるものへと革命化されることによって、共産主義革命の思想的土台が形成されます。思想文化革命と科学技術革命を同時的に効果的に進行していくこと、社会主義革命を完成し共産主義社会の思想的、文化的、物質的土台をつくります。もちろん、現在におけるソ連でのペレストロイカが「人民の主権を確立し、社会主義を刷新していくものとしてある」と肯定的に評価しますが、難燃革命としてのペレストロイカでなければ、ゴルバチョフの言つ「社会主義の再生」は「社会主義の清算」にしかならず、それを支持する」とはできません。現代修正主義的道路を選ぶのか世界共産主義への道を選ぶのか、道路はそのどちらかです。

ソ連型社会主義で難燃革命が存在しない根柢は、精層は人間の位置と剥削（マルクスの出発点）を軽視していることになります。難燃革命がなければ、侵略と掠奪に抗して闘つてきた創設期の人々から困難な時代を知らない若い世代へ移行すれば、革命の意義は遠れて資本主義の本質を負損ない、その見かけの繁栄（それも第二次世界の収奪のうその）に惑わされて革命を後退させる事態を生みます。

そして、科学技術革命の決定的な違いは社会主義的生産模式に欠陥があつたのである。第一に官僚主義による保守的非民主的経営、第二に軍事技術優先を余儀なく

くさせた帝国主義の反共包囲攻撃、第2に各国技術交流による民主技術の高度化ハイテク化を帝国主義機関はココムなどを阻止させていたことに原因しています。日本のブルジョアジーの誘惑ハイテク技術も技術封鎖されなければなりません。

第一の根柢は無謬の党體です。無謬の党體とは、党と間違はず党が労働者階級を代表し人民の利益を代表しているとし、党を絶対的に常に正しいとする觀念がありその考え方のことです。「これがスターリン主義の本質であり、「反ヌクタ」や「非ヌクタ」を建前とする日本の左翼も少なからず影響を受けています。スターリンは「党は階級の一部」と述べていますが、党が階級を代表（体現）する意味で使っています（レーニン主義の基礎）。

我々は文字通り、一党的階級の一部」とともに、党が階級を代表するのではなく、ではなくあくまで相対的なものであり、党的階級の前衛としての存在はア・アリオリ（先駆的）ではなく、ア・ボスティリオ（後退的）なものといっています。党が階級を真に代表しているか否かは、党が決めるのがなく、党的実践に対する労働者、人が決定するものとしてあります。また、その性質は承認的なものではなく、不斷に檢証されるものでなくてはなりません。党が階級を代表し目的意識性を示して指導性を發揮するには、党自身の不断的革命化（自CD批判=自CD革命）が必要されます。なぜなら共产党として階級の一部を主張しているに過ぎず、党も間違いを犯すという前提から出発する必要があるからです。党に必要なことは不斷に自身の実践を検証し、誤りを見つけ正していくことです。そして何よりも重要なことは、革命の主体は労働階級を中心とする人民であるとともに、党的累だすべき役割を人民が革命の主人公としての位置を担えるように人民の闘いを援助することとしてとらえることです。レーニンは「ソビエト権力は、労働者が自分の政党に満足しない場合には、自分の代表を選択し、権力を他の党へ移し、いまさかの革命も伴わずに政府をとりかかる可能性を労働者に与える」と述べていました。党が人民にして異なる代表にとって代えられるという緊張が党的腐敗、硬直、独善、官僚主義、代行主義を防ぎます。党は大衆を離れる党でなければなりません。

原則的に、労働階級の利益を表現できる党が、共通の価値観で統一されるべきなので、一つの党だけなければならない。より正しい道が複数あるのではなく、一つに選択されるべきものだから。しかし、革命の初期の段階において複数の労働階級の党（前衛党）の存在は必然であり、それは認めるべきもので、強引に「单一化すべきものではありません。また、ブルジョアジーを除く諸階層の利益を代表するのブル党の存在もプロ独立において許容すべきものです。單一党から始まるのではなく、社会主義革命の階級闘争の闘いの中で、革命の発展をつけて單一化される

べきです。そのためには社会主義革命の完全勝利まで、自ら通じた戦略的大局の統一戦線を形成すべきです。

もむろん複数党派の存在などとても、ブルジョア「民主主義」の主張する権利政治を認めることはできません。抑止者の代表権を奪つことが、被抑止者の代表権を確保するにすぎません。

ト制度は、ブルジョア議院制（簡潔「民主主義」で政治實質に人民主權を委す、同種の労働者階級の代表権が議会の「統治」に制限されている）を否定し、労働者、人民の主權を確立する直接民主主義の実現形態にしてあります。故に、党がソビエトを代行することを目的としたものではなく、人民権力の実現とその執行を目的にしたものがソビエト制度です。その意味で党とソビエト、党と國家は分離されないのがねばなりません。党が人民権力を代行してまつたことによつて、党的自體主義化が発生しました。党が人民が眞の人民の権力を行使するゆゑに人民の問い合わせをあくまで援助する立場を基本とし、指導性の基準をそなへて置かなければなりません。

ソ連共和国主導國においては、党的自體主義的政敵ことの「プロレタリア民主主義の徹底」を前提とした労働者階級によるブルジョアジーに対する独裁が、党によって人民に対する独裁へとすり替へられてきました。その結果、これらの社会主義共和国においては、党員になることが最高目標への登竜門となり、マルクス・レーニン主義の学習も人民に奉仕・革命を実践する道ではなく、「上級國家の務め」と規定されたための必修科目に落としてしまいました。これではソ連共产党規範にある「党員は人民に服務する」という想定が有名無実化し、党員になることがノーメンクラッサーへの道になり、党員が人民の信頼を失うことは当然です。」このような「社会主義」では資本主義を退れとつて当たります。ボーランド「連邦」のワレサ委員長がいみじくも言い表わしている言葉があつます。「ボーランドの共产党主義者に会つたのは今までほんの一、二三人だ」と。

黄が党的革命のシステムをもつてしなければ、過去のよつた革命的公党がある。れ、腐敗するものは当然であり、ついには人民の打倒対象になつてしまひます。「人民大衆の中では、我々は何と言つても大海の一滴である。だから我々は人民が主張して居るものを正しく表現する場合」としか統治する」とはできません。もしそうしなら、共産黨はプロレタリアートの指導する」とだが、プロレタリアートは主義を争ひない」とにならう。そして全機構が崩壊してしまつであろう」（一九二二年）

労働者が主人公であるはずの社会主義の国で、人民が支配の対象や道具になつていれば、その社会主義國が崩壊するのは当然です。」これはアルジョアジーが言つたる「社会主義の崩壊」ではなく、「廢敗した党は代表された社会主義の崩壊」です。第三の根拠は無謬の党規とも関連しますが、人民第一、人間第一の社会主義革命からの逸脱があります。何度も言つちよに革命と建設の主体は労動者階級を基本とする人民であつて党ではあません。ブルジョアマスコミは「プロレタリア独裁」と「党制（一党独裁）」とを同じものとして批判していますが、それはもがつています。プロレタリア独裁はプロレタリア民主主義が前提あり、独裁の対象は人民全体に対するではありません。資本家階級に対してもあり、革命と建設の実権を党ではなく労働者階級が握ることを基本にしています。そしてこれは労働者階級が永遠にアーロ独裁を続けるということではなく、階級対立を完全に止揚した時に廃止するものです。社会主義はブルマスコミの言つちよな「自由を抑圧した体制」ではなく、人が人間を支配・搾取・差別する「わがまま自由」を除いた人間的本源的自由を労働者人民に保障するものとしてあり、マルクスにおいてもレーニンにおいてもそのように規定されています。実際にそつです。國家権力が独占資本の手から離れ、労働者人民の手の中に移り、徹底した人民の民主主義が保障される制度のことを社会主義と言います。

本来、社会主義と言ふは、徹底した民主主義のことであり、資本主義の言つての「民主主義」はブルジョア民主主義です。ところが今はわざわざ「社会主義的民主主義」と言わねばなりません。現在のソ連、東欧の情勢は人民第一、人間第一でなかつたことの必然的結果です。すべての決定権は人民にあります。もちろん自然発生的に（そのままの状態で）、人民がすべてにおいて先進的で正しいとは言えません。しかし、主人公は人民であり、人民がよき正しい目的意識を持てるように、自らを不斷に革命しながら、行政的指令や強制ではなく、説得、教育、共感の結果によって、現代の人民が歴史上はじめて先進的な人類としてその役割を果たせるようになりますのが、眞の労働者階級の前衛党・共産主義者の党的任務です。

「計画経済」の破綻と官僚主義の人民蔑視、人間尊徳によっています。本来、計画経済は、「生産の社会性と生産手段の私的所有の矛盾」を主張して収取を廢絶するため、資本主義の独立的利潤追求の無政府的生産を止めさせ、人民生活・社会に最も適合した無駄のない生産を確保し、系統的計画的に発展させる生産手段の共同所有の「社会主义の優位性」の一つとしてありました。それは労働者、人民大衆を生産の道員としてではなく、生産の主人にするものとして本来はあります。ところがソ連効率主義における官僚主義の基礎は、生産から消費までの経済のすべての過程から人民の意志を排除した行政的命令的システムによって、社会主义の目

的に進行した事態を引き起しました。人民の意志も要求を反映しない非民的「計画経済」では、労働者は労働意欲を失々し、そこでは生産に対する意欲も燃えません。生産は必ずしも、ただただ最小限のノルマ達成とわずかに報奨金の為の労働にしかなりません。これが「労働力の商品化」を基礎とする資本主義と何ら変わりません。これどころか飽くなき価値増殖に走っている資本主義の生産力に追いつき、追い越すことは不可能です。社会主義経済に人民を中心とする革命的で民主的な運営がなければ、それは單なる「技術経済」にしかなりません。

官僚主義的計画経済に取って代わるにあつては、現在ベレスト「ロシアの構築が世界の進歩で
生産手段の私的所有の承認を完全な自由市場経済の導入によって廃止されると、社会主義は生
産者の競争を強め、生産力を高めようとしているのです。「発達した資本主義社会に
倣う」というわけです。確かに社会主義の発展過程において、資本主義の發展的要
素を採取し独自の条件を取り除いて利用することは必要です。ところが彼らは実現
不可能のユートピアとして世界共産主義の実現の目的意識を否定し、帝国主義の第
三世界からの収奪による富の蓄積を主張し、帝國主義の物質的豊かさ自体が
くふみ、「市場経済力説」に組してしまいます。資本主義の善悪、反動性を過小評価
し、「日本式資本主義」を美化する傾向すら存在しています。東欧においては、「一
能力のあるものが報われない社会（これが弱者切り捨て社会なのだが）」が、「自由
で民主的な社会」と公然と語られるようになっています。」これでは「一九世紀の資
本主義」を東欧「再来させる」といしかねないとよいでしょう。

資本主義の政策を経て商品経済が充分に発達していない段階での社会主義建設
を発展させることは、商品生産の果たす役割を認め、價值原則の作用を利用する必要
があります。社会主義建設を進める技術的土台が必要だからです。重要なことは、
極左的に価値原則の役割を無視したり右翼的に価値原則が能に障るのではなく、民
主的人民的計画経済を基本にして価値原則を利用しながら、人民経済の発展といふ
に商品生産の「上場を計ること」です。

第四の根拠は、東欧ソ連の「一元的指導下に置いたこと」です。プロレタリア国家
主義としての社会主義国の団結、同盟関係、軍事防衛協力、経済・技術協力などは
絶対に必要なことがます。しかし、ソ連と東欧の関係においては、各開拓の民族的差
異、革命の發展段階、その主体力量、条件などの違いを踏まえた自主、独立を基本
にした各国家の自力更生のうえの同盟關係としてはなく、ソ連生産を中心と
した二元的指導体制になっていました。結果として、各国家は従属的依存的立場を
脱却しきず、自力で社会主義建設を行なう力を持つことができず、自国産業を画
的国家分業により、自立精神をもとにした均等的な充実が計られませんでした。今回

東ドイツを見られたような旧指導体制の急激な崩壊は各國の党が自國人民の支持をほとんど得ていなかつたこと、ゴルバチョフ政権の支綴がホーネッカー政権に対して一切なく、逆に崩壊を促進されたことによっています。東欧各國の党は建国以来、何れ共産主義者の党としての役割を果たしていなかつたことが、四〇年以上も経て明らかになりました。東欧各國の党がなんだソ連共産党の方へ見えていたた事大主義者であつたことを示しています。他方本願の党では何ら革命を領導しないことが明らかになりました。スターリンが犯した誤りはソ連を世界共産主義の原型とし、その回り同心円的に拡大するなどによって世界共産主義を実現しようとしました。これが各国の自決権を否定しそう運動を押しつけるなどにつながり、各国の自生的革命との結合のうちに世界共産主義を実現するのではないか、世界労働者ソ連党としてたる為に、東欧社会主義圏の併属化をしたと言いました。結局、今日の廻境に到りました。

第五の根拠は、帝国主義の侵略戦争と帝国主義による政治的経済的軍事的反共包围です。十月革命以来、ソ連は帝國主義列強の干涉戦争を全國的に受け、それ以降も、ナチスドイツと日本帝国主義の反共包囲を受け、社会主義建設の多くの成果を国防費に投入せざるを得ませんでした。アメ帝、日帝、ECのGDPの合計の九分の一のソ連が、それに対するだけの軍事力の保持を強要されたのは大変な負担です。資本主義社会にとって軍事消費は國家予算として浪費がはあっても、重商主義の利潤として吸収され、「生産的」なものになりますが、社会主义経済にとってそれは浪費以外の何物でもあつません。社会主义国家における軍事費の負担はそのまま民生用費の圧迫につながり、人民生活を犠牲したものになってしまいます。帝国主義による戦争の發端がなければ、既存のすべての社会主義圏の困難はあるかに軽いものであつたし、社会主義建設はより発展していくことでしょう。

第六の根拠は國際共産主義運動の分裂です。一〇年代以降のトロツキー主義者たちの追放と敵対、五〇年代のチトー主義者たちの追放（六〇年代のソ連・中国の对立、七〇年代のベトナムのカンボジア軍事介入（いかなる理由があれ、軍事力をもつてボルボト政権を倒す権限はベトナムに全くなく、正当化することはできない）。インドシナ革命の分裂と対立は國際共産主義運動に多大の苦を与えた。ボルボト派を離ぶかヘンナム派を選ぶかはカンボジア人民自身の決断に委ねるべきだ（ベトナムと中国の戦争と最後には社会主義同志の戦争にまで發展しました。各國の革命勢力も然りです。）このよつては帝國主義者に魚夫の利を手へ、プロレタリア国際主義の實を弱体化し、社会主義を求めて闘う世界の人々の利益を大きく損なつてきましただけです。

第七の根拠は帝國主義本邦の革命勢力、進歩勢力の弱さです。発達した資本主義

国における革命を成功させて、社会主義諸国に対する帝國主義の脅威と弯曲を解除し、援助する」とができますが、帝國主義本邦内左翼の責任も重大です。革命を成功させずとも、自由帝国主義の社会主義諸国に対する庄振を弱めさせる「ソ連も日本もできました。日本安保条約の破棄どころか、在日米軍の非核化すらできません。左翼の中には、残念ながら多くの友人たちは「ソ連・東欧問題」を第三者的に語り、「破綻は必然だった」としているだけで、日帝の反共政治を変えられなかつたために社会主義諸国「困難を強いてきました」とに対する日本の責任を問うています。「從来からソ連・東欧を批判していたから」では説まされないとです。

第八の根拠は資本主義の発達が遅れた国々の革命があつたこと。第八は「破綻の根拠」というもの「困難の根拠」と書く方が適切でしょう。

極端的土台の低い段階から形成せざるを得ず、商品経済が十分に発達していかなかった結果として社会全体の生産の組織化が不十分であつたこと、人民大衆の一人ひとりに民主主義の意識、自尊的意識が十分に形成されていなかつたことなどがあげられます。ソ連では高い重工業生産を確立しても、人民の生活水準を高める多様な要求に応じられる商品経済のシステムが未発達であった点は、消費財の供給は資本主義より遅っていました。このことに対する考慮が十分にされずに、重工業生産に高めるとして産業構造が「社会主义の發展にこゝで変化することなく偏ったままではあります。官僚主義の下、この構造が是正されず、現在の消費物資の不足をもたらしています。また、人民生活に必要な通貨、サービス部が十分に発達していません。しかし、だからと言つて、資本主義の段階を経なかつたら、七〇年かかるとも社会主義革命が發展しなかつたと言ふるでしょうか。資本主義を経なかつたら「個人の自觉」が薄く民主主義的意識が十分に形成されなかつたと言ふるのでしょうか。資本主義を経なかつたからではなく、「戦時共产主義」的政策が和平時代も適用されてそれが社会主義とされ、行政的、命令的な官僚主義が支配的地位を占め、社会主義的民主主義の実現、眞の人民権力の樹立に熱心でなかつたこと、産業構造・化学技術の不断の革新に熱心でなかつことが今日のソ連社会主義の破綻につながりました。かつての（一九一七年）メンシェビキのように（あるいは今日の投降主義者のように）、ロシアではますます資本主義を保護せらるべきで社会主義革命は断念すべきと主張するのは明らかにまちがつています。人民権力を樹立できる条件があればまずそれを獲得すべきであつて、人民権力の下で商品経済を發展させれば良い。便運法則の作用を認めながら無政府的市場経済を統制し、人民的計画経済を労働階級の主導権の下で发展させる」とはできます。レーニンが革命後の防衛戦争に勝利した後、戦時共产主義を直ちにやめ、「ネップ」の政綱をとつたのは、労働

者階級以外の階層の力を利用し、彼らも運動して商品経済を発展させ、社会主義の種族的土舌を固めて段階的に革命を發展させる為でした。労働者階級が権力の国において、それが可能でした。社会主義革命の前に資本主義を絶るべきというのは教条主義であり、発達した資本主義国での革命がなければ資本主義の遅れた国での革命は成功しないとするもの教条主義です。

(3) 「新思考」の積極的側面と否定的側面

ゴルバチョフは「新思考」の核心について次のように述べています。「核の脅威の増大や、他のグローバルな問題の先駆化、あるいは矛盾を伴いつつもありますが、全般的で相互に依存した世界のすべてのプロセスの国際化の強まりを特徴とする現代の立場から、われわれは、マルクス主義の中に初めてあるプロレタリアートの利害と全人類の利益の相互関係という思想をもとに深く考えてみた。その結果、われわれは、現代において全人類的価値が優先するという結論に達した。ここに新しい政治思考の核心がある。」

○積極的要素は何か

八六年のチャルノブイリ原発事故が地球上の人々に示したもののは、事故であってもその放射能の害は一国だけではなく、国境を超えた被害をもたらす」とでした。核戦争は今や勝利者のいない戦争になることがはつきりしました。「これは確かに第二次世界大戦以降には考えられなかつた状況です。核戦争になれば敵も味方もなく、どちらも倒れてしまします。であるなら、帝国主義に「全人類的価値の優先」を呼びかけ、国際連携とともに、「アメ帝」と核の廃絶を迫る」とはできます。この意味において、平和政勢の戦術としてなら「新思考」外交は有利なものでしょう。しかし、問題が何点あります。

○否定的要素は何か

第一に、アメリカ帝国主義は「全人類的価値を帝国主義の利益に優先させる」理性があるかどうかといふことです。世界の緊急をつぶつ出してきたのは社会主義国や共産主義者ではなく、一貫してアメ帝でした。ブッシュ政権は昨年二月のマルクス主義で「東西調和」を述べた舌の根が乾かない間に、ルーマニアの民衆蜂起において、平和政勢の戦術としてなら「新思考」外交は有利なものでしょう。しかし、問題が何点あります。

ども協調するのは自由です。ソ連のペレストロイカを成功させる為に、現在の「ペレスト・リトフスク条約」が必要ある」と理解できます。しかし各国の人民の反帝、反米闘争にソ連が介入すべきではありません。たとえばアンゴラ政府が南アフリカ政権がブッシュ政権の交渉に同意するが、拒否しますが、それはアンゴラ政府が決定すべきことです。各国の発展段階、状況によって徹底抗戦もあれば、妥協もあり、武装闘争堅持があれば停止と市民運動もあります。各国の階級闘争のすべてが「全人類的価値」に優先されるわけではありません。ソ連がこれを認めていれば、「新思考」の外交も可能です。とにかく、アメ帝との矛盾をかかえる第二世界、帝国主義本邦革命主体の反帝闘争に対する介入の権利はソ連にありません。ソ連が「新思考」外交を押しつけるのであれば、たとえソ連が帝国主義との協調に成功しても、再び大国民主義の誤りを犯すことになります。ゴルバチョフは、「各國の階級闘争の必要性は認めると断わってはいませんが、資本が国境を超えて結びついでいる現在、階級闘争は一国的なものにはとどまらず、國際帝國主義との矛盾にまで發展する」、その時にソ連がどういう態度をとるかということです。ソ連がどの帝国主義に協調しようとも自由ですが、その国の階級闘争が発展した時に、それを阻害する要因になるべきではありません。

ソ連共産党が日本社会党と関係を深める」とに対して日共は内政干渉と批判しているが、ソ連が日本の民主勢力がある社会党や「日本の声」派などのよき関係をもつとうとソ連の勝手だし、日本赤軍を「マイオイスト」と批判するのも自由です。しかし、今年一月の衆院選であるソ連外務高官は「自民党政権の維持を望む」と述べたと日本のマスコミが報道していたが、このような国民党支持をソ連の外交上の都合から呼びかける自由は全くありません。現在、ソ連は朝鮮（韓国）の資本と技術を欲しいが為に「クロス承認」（米が朝鮮を承認しソ連が南を承認）」と/orか單独で承認する方向で動いていますが、ノテウ政権の意図は朝鮮の分離独立及び民主勢力と野党からの攻勢の危機脱出になり、ソ連の行動は南北朝鮮人民の意志を無視し、人民の翻意に敵対することになります。政局の危機にあるノテウ政権にソ連は浮き袋を扱げ与える行為を「新思考」外交の名において行なっています。ソ連の個別利害の為に、他国民に対して帝國主義への屈服や反対政権への服従を強いることは、大国民主義的誤りです。フィリピン革命が發展してアキノ政権が崩壊しよった時に、アメ帝との協調の為にフィリピン人民の關心の利益を一次的にする構思はソ連にはありません。国際聯共連合（世界統一協会）の文聲明の「世界言論人議論」をモスクワで開かせ、ゴルバチョフが会議し、ブリウダが文聲明を積極的に評議するにいたっては、国際反革命運動に手を貸したもの同然です。これは「新思考」外交ではなく、ただの「投降主義」外交です。

④ 東欧改革の積極的側面と否定的側面

日本の一部左翼の友人読者の中に、スターリン主義的官僚主義の崩壊と「民主化」を無条件に評価する傾向がありますが、それは正しい態度ではなく、「黒猫でも白猫でも不ズミを取る猫はいい猫だ」という観念的で誤った考え方です。本質を見極める必要があります。言つまでもなく、東欧民主化の根柢は旧政権の官僚主義的誤りの清算であり、真の人民権力を成立させた「党的組織」(黨の組織)を置き換えたことに対する人民の怒りの表現です。だが、人民の自然発生的な運動であるが故に、旧体制の変革を促す積極的側面と即時的利益を追求するという否定的側面をもっています。

積極的側面は党の官僚主義化のために党の支配の対象に落とめられていた人民が自らの意志を活かし、人民の権力を樹立したことです。政府が真に人民を代表しておらず、人民には代表を代える権利があります。しかし、否定的側面も大きなものがあり、当面の流れは旧政権に対する即時的な反発の為に、一部の左翼の意見では決して「好ましい状況」になると主張せん。

否定的側面について

その第一は、「ソ連共産主義」の否定が留まらず、社会主義そのものの否定にならっていることです。東ドイツやハンガリーの選舉結果に見られたように、社民政権から受け入れられずブルジョア政権が復活しました。西側社民政党、ゴルバチヨフの予測を貿事に裏切りました。私自身も社民政権が優勢になるだろうと予測していました。結局、ブッシュや海部の望む保守主義的な資本主義化に動いていたことを喜んで認める必要があります。もう一つの動向は恒久的なものではなく、革命期につきものの振りもどりですが、資本主義によっては眞の人民の自由と民主主義が実現されない以上、社会主義を求める人民の鬱いが巻き起こる」とはまだがないかもしれません。

第二は、民主化運動の品場の中でその指導的地位を占めているのが、労働階級ではなく知識人を中心としたアーチブル層です。ボーランド「連邦」にしても例外ではなく、インテリ派とフレサ派の分歧が始まっています。一部の人々を除いてその政治傾向は必ず社会主義の再生に目的意識があるのでなく、資本主義の改良的適用を基本にしています。東ドイツの民主化運動を抜けた「新フォーラム」のように、資本主義の官僚主義を否定し、眞の社会主義の再生を目指していた人たちもいますが、情勢の変化の過程でブルジョア政権へと移され、選挙では三〇%の支持しか得ていません。又、社民化いつも同じく再生を目指した民主社会主義者も六分の一の支持しか得られませんでした。東ドイツの急激な右傾化はハンガリー、チェコスロバキアの右傾化をも促進しました。この傾向は西側社民

勢力をも驚かせている傾向です。「これは眞の労働者階級の利益を代表する勢力が不在である」とことによっています。

第三は、「民主化」運動の背景に、帝国主義と世界シオニズムの後押しが存在していることです。東ヨーロッパは元々、ユダヤ系住民が多く、シオニズム運動の盛んな地域でした。イスラエル労働黨の創設者たちはその多くが東ヨーロッパ系ユダヤ人たちでした。ルーマニアの一月の蜂起の際に「リビヤ兵がチャウニエスク側に立ち戦闘に加わっている」とデマが流れました。これは明らかにシオニストが流したデマです。チャウニエスク政権のみが六七年以降も社会主義諸国で唯一イスラエルと外交関係を持ち、しかも敵対関係を維持し続け、歴代のイスラエル首相が訪問していました。そして現ロマン・クルツはユダヤ系です。エコスロバキアのハベル政権の外相はモザド（イスラエル情報工作機関）の要員と目されていた人物が就任し、保安官員や下士官たるユダヤ人です。もちろんユダヤ人であることが問題ではなく、シオニストであることが問題なのです（オーストリアのクライスク元首相はユダヤ人であっても非シオニストでイスラエルの侵略政策（占領政策を批判していました）。さらにハベル大統領はライ諸国への武器禁輸を停止し、西側マスコミに「前政権がリビヤにテロ用特殊機器を供給していた」と看過的で情報を流しました。五年のハンガリー動乱後にもシオニストのソロス財團が反体制派を支持し、独自の政敵勢力をつくっていましたが八年に明らかにされました。東欧諸国は次々とイスラエルとの国交を回復し、ソ連の改革派の中にはパレスチナ人民のインティファーダを「中東和平の障害物」、「投石は手口行為」と言い出す者が出ています。東ドイツのデメジエール政権にたっては前政権の反シオニストの立場を「自己批判」する有様です。イスラエルはパレスチナ人民の蜂起によって国際批評の非難にさらされ、EC諸国からの支持を失っていますが、東欧の変化を利用して東欧各国のアラブ・パレスチナ支持、反イスラエルの立場を変えさせることに集中し、経済・技術援助を強めています。西政権ノルマ政権のソ連・東欧に対する「北方外交」の動機と方法もイスラエルと同じです。

第四は、反米闘争を繰り返す第三世界人民との連帯から後退しているだけではなく、帝国主義陣営の要求に応じている点です。反ソ感情の高まりの中で、帝国主義陣営のアメ玉た目がくらみ、反米闘争そのものを否定する傾向が主流になっています。前述したパレスチナ革命に対する態度がそうであり、UN人権委員会におけるアメ帝のギューバーにおける懸念に満ちた中傷に対して、ボーランド、エコスロバキアは米国系の共同提携国になりましたが、ハンガリー、ブルガリアが支持にまわる國式になりました。朝鮮半島問題でも、これら東歐諸国の態度は反動的で、一

手を貸すだけではなく、韓国人民の反米、統一、民主化要求運動と朝鮮民主主義人民共和国の解体にも手を貸すとしています。これにソ連の「改革」派も加わっています。ANCがハンガリーと南アとの国交樹立を非難しましたが、ハンガリーは反省の色もなく、南ア白人人口の増大に協力しハンガリー人の移民まですすめています。これが現在の東欧諸国の傾向としてあり、スエーデンやオーストリアの社民政権のほうがはるかに進歩的であると言える状況になっています。自分たちの経済的利益の為に、第三世界人民に犠牲を強いるのが東欧の「民主化」であるなら、それは眞の民主主義ではありません。今や東欧諸国はキューバ、朝鮮、アンゴラなどの第三世界の社会主義諸国をアメ帝に背後渡し、パレスチナ、フィリピン、ニカラグア、アザニアなどの人民の闘いをも支持渡しています。抑圧者の側にまわる民族に眞の民族の解放はありません。

我々は「上によつて、重陰「民主化」の構築を主導する立場に立ち、しておる。筆者たるが
あります。
社会主義再生には民主化は避けて通らざる事がない重要な問題ですが、自ら発
生的で人民の鬨いがブルジョアジー、チープル自由主義者のハゲモニーに收れさせ
れる時、東欧の人民は再び革命を裏切られる事態を迎えてます。我々はスターリー
ン批判、官僚主義批判の側からだけでは東欧問題を分析するべきではなく、世界革命
プロレタリア国際主義、反帝国主義の観点から希望的主觀的にはなつ、客観的に
弁証法的に分析するべきです。眞の革命派が現在の東欧では小数派でしかないこと
も、当面の傾向は資本主義化であることを事実として認めなければなりません。こ
れは「社会主義の敗北、資本主義の勝利」を求める事ではなく、東欧社会主義四
〇余年の正負の教訓を正しく引き出し、眞の社会主義革命の勝利を準備する為です
我々は事実から出発すべきです。

⑤

東欧の当面の展望は資本主義化と言いましたが、私は長期的には資本主義への後退が逆に東欧の社会主義への進歩をつくりだすと断言します。そしてソ連のベレレストロイカが眞の人民の権力を樹立立てる方向にあるのなら、その条件つきでベレレストロイカを支持します。人民が革命と社会の主人になる闘いにおいて、一〇年、一二〇年の混乱と後退は戦略的には歴史的な進歩の時代を産み出します。東欧社会主義は今までの旧体制の在り方が社会主義的民主主義（眞の民主主義）に欠けていた為に崩壊しましたが（状況によってはソ連も）、その官僚主義の呪縛から解かれた人民の自由な意志は、旧体制の反発と発達した資本主義国の経済力に対する幻想から資本主義的生産関係に「自由と民主主義」を求めています。しかし、権力が独立資本の手にある資本主義の特徴は抜擢、抑圧、差別、侵略であり、フィデル（カストロ）

口)が指摘しているように、東欧人民は、自身の実際の体験により、眞の自由と民主主義を資本主義に期待できないことを知るでしょう。そしてその経験は社会主義の価値観である自由、平等、連帯、共生を求めるさせ、眞の人民権力の樹立へと向かわせます。眞の人民権力の樹立こそが社会主義の本質的特徴です。

西側資本主義者や東欧の改良主義者（走資派）が主張する「自由市場経済、生産手段の私有化」、国産産業の民営化で、東欧が日本の戦後復興のよつて發展するでしょうか。答は短期的にはイエス、長期的にはノーです。東欧諸国（いずれはソ連も）は階級を打つて資本主義化していますが、杜民路線（改良資本主義）でもなく、新保守主義的経済政策（いわゆる小さな政府、市場を見る手に任せた）をとりつつあります。ボーランドは米ハーバード大学のマネタリスト学者を経済顧問にして「大きいなま美験」を始め、ハンガリー、チエコスロバキアも新保守主義の方向にあります。ルーマニアとブルガリアは社民派が優勢で社民路線をとっていますが、西側諸国からは「議会制民主主義」で正当性に多数派を占めているにもかかわらず、「共産主義者の化身」としてしか扱われず経済援助の棚上げと国内反動勢力を利用した圧力を受けており、保守化は時間の問題となっています。東ドイツは西ドイツに吸収される為にドイツ型資本主義そのものになろうとしています。資本主義化に程度の差こそあれ、「社会主義の再生」にはまだ遠い状況になります。しかも IMF F、歐州復興開発銀行の資金援助をエサにした「債務返済と復興の為の『改革要求』は、ベネズエラ、ヨルダンなどで物価暴動の原因になった IMF コンデンショナリティ、すなわち補助金打ち切り、国産産業の民営化、公務員及び労働者の大量解雇、福祉予算の削減などのワントーンで西歐や北欧の社民政権下では行なわれない政策となっています。IMF や歐州開銀の勧告に従って「改革」を行なうなり、それは東欧人民の期待するものとは全く異なった、外国資本優先、弱者切り捨てでの冷徹な資本の論理に人々は直面することになります。民主主義的意識に自覚め、官僚主義に至められたはしたが曲がりなりにも社会主義的価値観を知っている人々にとって、これから直面するであろう資本主義の過酷な剥削と競争の論理は、日本人のようにあきらめ耐える対象ではありません。東欧の政治的・社会的不安定は資本主義化すればするほど深まり、眞の人民の革命の条件は遠まるでしょう。

日本のマスコミ報道によると、東欧諸国は日本の経済発展に倣おつとしているそうですが（東欧諸国が日本に対するリップサービスと日本のマスコミの誇張があるが）、彼らは決定的な相違を理解していないと言えます。日本の戦後復興をまとめる大都市工業地帯は爆撃によって破壊されたが本土決戦が回避されたので基幹産業の基盤と産業システムは生き残った。②終戦直後からアメ帝は反ソ反共世界戦略の必

要性から日本の対米ソ連的資本主義の復活を促進し、マーシャルプランから積極的な経済・技術援助を日本に行なった（竹村謙一などの橋本光井が提案の市ヶ谷赳）に米国がそくしその日本の窮屈な立場を取つたのは事実）。④ナメ帝の軍事政策下に組み込まれた敗戦と比較して相対的に低い軍事費（対GDP比）に押された（豪華改修隊の美國には戦後「平和憲法」が日本の経済成長に幸いした。豪華改修には六〇年代まではアメリカが日本の軍事費を削減したことになる）。⑤GDPによる「民主化」（財閥解体、農地放牧など）が資本主義社会の為の基礎的条件を設け、いた。⑥国民党初期改修下で強占日本が國家を完全に掌握した豪華改修が敗戦。⑦GDPの底質的動力と中国からの自由貿易改修によって國際競争力を持ちうる豪華の育成。⑧近畿改修と中国からの資源供給と低賃金労働力の確保。⑨新規開拓、地主者主導の時代が多くの民衆主義的豪華や貴族豪華が弱いので資本による豪華改修が充実で、功序制の下で企業に対する豪華が強化。そのため高賃金の割りに生産性があがく、商業企業に比べて生産性に占める賃金コストが著しく高い。國家の企画に沿った政策に対する人々の抵抗力が高い。⑩資源は「テラス構造」に転化されるが豪華が必須であった。⑪豪華の競争特徴（朝鮮戦争、ベトナム戦争）があり豪華が現行の重商主義の条件の違いは何か。⑫戦後の米国によるマーシャルプラン（経済力を持つていても米国がどうなっているか）と日本との差異が基本がある。今回は米国と日本の重商主義による金融支配、市場支配を目的とした援助により、豪華改修は重商主義の二極に対する経済的均衡化をもたらすだけである。（豪華主義を解体した上の資本主義化の為に国民党は影響されておらず他の國は日本資本の裏面支配を続けることになる。⑬日本のような豪華の競争特徴の「差違」は起こらない。⑭日本の財政改修に対する東欧人民の抵抗が大きくなる事を高めらねば日本のように人民生活を犠牲とした企業の資本主義、田舎資本との競争力はできない。など、概要、豪華改修がもたらしたヨーロッパにおける第二次世界大戦（政治問題の発生）か、人民革命の活性化を受けるかにかかるでしょう。

豪華が「孫子主義の時代」を構成している間にレーガンとサッチャーの「新保守主義」が瓦解はじめても、ヨーロッパ議会の選舉に明らかにした歐州での豪華改修は、豪華勢力の伸張が主流になっています。その政治潮流が言えど、東欧の崩壊は一時的で外流化が主流になり、その中から真的の社会主義の再生に向かう活動が始まるでしょう。社会民主主義の本質は資本主義の改良であり、社会新左翼であり、人民の解放の思想たりませんが資本主義から社会主義への過渡の現象を見た時、社会化は決して後悔ではなく進歩です。二〇〇〇年のヨーロッパでは豪華が主要な複数となり、二〇一〇年にはそれを乗り越える社会主義の潮流が主流になると予言

しておきます。

八八年の「豪華」で、「ソ連、中国などの社会主義国家は人民参加の改革を進め、社会主義の發展をつくり出す」と私は述べましたが、その基本動向には変化はありません。改革（豪華）の底層の階級は革新的な努力の自己革新の能力、人民民主権の確立にあります。これが大きな指揮力は舞台から去るだけです。八九年に「天安門事件」や東欧の運動がありましたが、「党」の指揮の仕事としてあり、歴史の發展面前を棄てた「資本主義の優位性を証明する」情勢ではありません。ソ連、東欧の労働階級と共に資本主義者たちが過去の正直の教訓を正しく継承し、現在の在り方を変革し、そし民自身の主権を完全に確立しようと、時に新しい社会主義の芽が生えてくるでしょう。資本主義国、社会主義国、第三世界を問わず、抑止力のあるところには抗争があり、世界中の人民が自らの権力を求めて立ち上がる人民革命の時代が到来しています。東欧人民の「民主化」の願いが真的の人民の自由と解放を求める第二世界人民と連携を求めた時は、東欧の人民革命が真に發展する時期を進むるでしょう。（以下、省略）

冬季カンパのお願い

泉水・丸岡両氏の公判が新たな段階に入ります。「東西」の枠がはぎとられてものごとが赤裸々に露呈する中、未来から照射された現在の実生活を共同していきたいと願っております。

《郵便振替》 東京 2-398834
「帰国者の裁判を考える会」